

「おれにまかせて」

・おれにまかせて

夕暮れに広場のベンチで聖乙女が一人ただずんでいた。
ジェムスで1, 2を争うナンパ師ペリドットが通り掛った

「やあ、かわい子ちゃん、どうしたの？」

彼女は俯いたまま

「いえ、べつに。」

声や肩が震えていたので

「もしかして、泣いているの？ねえ、話してごらんよ。

話すとすっきりするよ。」

笑顔で言うペリドットに話してみようと思った

「実は、友達と喧嘩したの。

思ってもいない事を言ってしまって、もう、元の様には戻れないかも。」

そう言うと彼女は泣き崩れた

「なんだ、そんな事！」

ペリドットさらっといいのけた

「そんな事って、ヒドイ。」

彼女は振り絞る様に言った

「その子と仲直りしたいんだろ？簡単だよ。

その子の欲しい物分かる？」

「ええ、それなら分かるわ。」

「良かった、彼女にそれを渡せばいいんだよ！

それで万事解決さ。」

「そんな事で、仲直り出来るの？」

「仮に君が同じ立場だったとするよ、
プレゼントされて嫌な気はしないだろう？」

「ええ、それはそうだけど。」

「うれしい気持ちは、他の気分を変える事が出来るんだ！

そうしたら、その子は笑顔になる。

その笑顔で君は素直に謝る事が出来るしね。」

「そうね、それなら謝れる気がする。

「ただし、一つ問題が・・・」

「問題？」

「そう、喧嘩の原因が異性問題でなければ簡単に仲直り出来る。

恋心は、思わぬ方に人を動かすからね。

これ程厄介なものはないよ。」

「そんな事が問題ではないの、ただ誤解を招いただけだから。」

ようやく彼女が笑った

「やっと笑ってくれたね。これでもう大丈夫だね、かわい子ちゃん」

「ええ、ありがとう！！

さっそく明日逢いに行くわ。」

「随分冷えてきたね、送って行くよ。」

「おれにまかせて」

「ありがとう、ペリドットさん、お陰で元気に成れたわ。

でも、買い物して帰るから一人で帰ります。」

そう言うと、彼女は街中に消えて行った

ペリドットは

「明日も君に幸福が訪れるように！」

声を掛けて彼女を見送った